

[論文]

ゆとり教育世代の学生たち

国際学部小学校教職課程の8年

山本 陽子

Characteristics of the students belong to Yutori Generation

— From eight-year of experience in teachers training course —

Yoko YAMAMOTO

Eight years have passed since the start of the elementary school teachers training course at Faculty of International Studies, Keiai University. During this period, all the students enrolled in the course belong to the Yutori Generation, or a generation educated under pressure free program in schools. They were born between 1987 and 1996. When the Yutori program introduced, there were a lot of concern on drastically reduced contents of subjects. On the other hand, it is expected that students would obtain capacity to study by their own motives instead of cramming.

With fact finding survey to the students, characteristics of them are not so clearly drawn, partly because of lacking comparative surveys. But some information for outlining general tendency of the generation can be obtained.

Though there introduced modification in Yutori program responding downturn of achievement, the basic notion still has significant importance.

Obtainment of teacher license is not obligatory for gradua-

tion from this year's graduates. Whether to get the license or not, I hope the students to learn what is important for living in the society from their campus life in teachers training course.

はじめに

21世紀を迎えるころから大学進学率は4割を越え、小学校教員も大卒以上の資格が求められるようになってきた。また社会の急激な変化に伴い、多様な価値観が浸透し教育現場を取り巻く環境も厳しさを増してきている。学校教育に対してもさまざまな要請があり、教員の資質向上は大きな課題である。

もともと敬愛には短期大学に初等教育科があり、1970～80年代を中心に数多くの小学校教員を千葉県はもとより首都圏を中心に輩出してきた。そのため、敬愛の名前は以前から小学校教員養成の機関として県内だけでなく関東近郊や東北方面にも広く認知されていた。

このような状況下、2007年4月敬愛大学国際学部国際学科に小学校教職課程をもつ「地域こども教育専攻」が新設され、4年後の2011年4月には国際学部「こども学科」に昇格した。この3月には小学校教員免許取得が卒業要件でなくなった「こども学科」として初めての卒業生を送り出す。すでに社会に出た4期の「地域こども教育専攻」の卒業生と合わせると敬愛大学国際学部小学校教職課程で小学校1種教員免許を取得した者は189名、2015年4月現在、正規の小学校教諭として千葉県、東京都、埼玉県、横浜市に勤務する者は60名余、講師を含めれば100名を超える人数になる。

教員免許は2009年4月からは10年の有効期間付きになり、免許更新講習が必要になる。2011年3月に初めて卒業生を出した本学でも数年後には卒業生のために更新講習が開かれることになるであろう。中学校・高等学校の免許とは異なり、その専門に特定の教科を求めている本学の小学校教職課程で、ゆとり教育世代といわれる学生たちは何を学んでき

たのか、国際学部の小学校教職課程の8年間の歩みを振り返り、授業等を通して触れ合ってきた学生の様子をまとめる。教育とは何かという大きな視点のもと、今後の「こども学科」は何を目指し、何ができるのか、教員を目指さない学生も視野に入れながら、さらに探っていきたい。

1. 「地域こども教育専攻」

小学校の教員養成は、その多くを戦前の師範学校の流れをくむ国立の教員養成系大学が担ってきた歴史がある。昭和40年前後、通学していた都内区立小学校の先生はみな旧師範学校かこの教員養成大学の出身であった。専科教諭として小学校に勤務している間、平成になるころには国立教員養成系大学出身と私立大学出身の教員の数は地域や学校にもよるがほぼ半々くらいになったのではないかと思われる。今後も私立大学の小学校教職課程で免許を取得し、教員になる人は増えていくであろう。

2007年4月、敬愛大学国際学部国際学科に「地域こども教育専攻」という小学校教職課程が新設されたと同時に、私は東京都公立小学校音楽専科教諭を退職して大学教員となった。当時の国際学部は佐倉キャンパスにあり、留学生（主に中国籍）が多くを占めていて、「地域こども教育専攻」の30名ほどの日本人学生は貴重な存在であった。

「地域こども教育専攻」の教員として設置当時の使命は、敬愛大学国際学部「地域こども教育専攻」という小学校教職課程ができたことを千葉県内の高校に知ってもらうことであった。千葉大学から定年1年前に赴任された数学教育の越川浩明専攻長に付いて、専攻長の千葉大時代の教え子で高校教員となって活躍している人の高校を訪ね歩いたり、一人で高校訪問をしたり、県内の多くの高校に出かけた。短大は小学校教員を養成する学校としてよく知られている存在であったが、国際学部4年制の小学校教職課程ができたことを知る人はなく、その関係をよく質問された。越川専攻長の人脈を生かした広報活動や国際学部のみなさんのご尽力で3年目くらいから少しずつ「地域こども教育専攻」の存在も

知られるようになった。それでも4年目の春、1期生の初めての教育実習で小学校を訪ねたときはまだ、実習校の校長先生の多くは短大と混同されていた。

短大は伝統もあり2年間で資格が取れることから入学者も優秀な学生が多かった。しかし、2年間の学生生活では実質1年で採用試験を受けるようなもので、じっくりと学ぶ時間はない⁽¹⁾。4年制の「地域こども教育専攻」では短大とは違うといわれる学生たちを育てたいと当時の4名の専任教員、越川専攻長、現こども学科長田口功先生、図画工作担当の小橋暁子先生（現千葉大学准教授）、音楽担当の私、は学生たちの自主性を尊重し、大学以外の場でも進んでさまざまな活動に取り組むことを勧め、それらの体験を通して自らが感じ考えてじっくり学ぶ機会を大切に、自由で明るい雰囲気をつくることに努めた。1学年だけからスタートしたので、専任教員は少なかったが、空き時間には学生一人ひとりとじっくり話したり、授業やゼミの時間にはそれぞれの経験や思いを語り合ったりして、学生同士互いのよいところを認め、伸ばし合うよう心がけた。

《1期生》

最初の入学（2007年入学）は個性的な学生が多かった。あと一步のところ千葉大学教育学部に惜しくも入学できなかった学生、高校時代は部活中心で勉強しなかった学生、部活の顧問教員にあこがれて教員になりたいという学生、別に教員になりたくはないが日本人だけだからこの専攻に入ったという学生、高校の先生にすぐ就職するのは無理だから大学に行ったらどうかと言われて来た学生等々、公立小学校のようにその姿は多様であった。一方、初めて大学の教員になった私も、長年45分1単位時間の授業をしていたので、90分の大学授業の内容や活動を構成することに苦心した。

設備や備品などは実際に授業を進めながら少しずつ整えていく状況で、途中で進路変更した者も数名あった。能力も性格も多彩な、人なつっこくかつしっかりと自己主張する学生たちは、明るく仲間意識が強く、初

めてなのだから、みんなでつくっていこうという気概にあふれていて、
ずいぶん助けられた。

卒業要件に小学校教員1種免許取得があったので、教員免許取得はなかなか難しいと思われる学生も周りの手厚いサポートと本人の努力で何とか教育実習も無事に果たし、全員が小学校教員免許を取得、7名が中高の社会、英語の教員の免許を取得することができた。

この1期生は2011年春、3月11日の東日本大震災の被害や計画停電などの混乱の中、卒業式が実施されないまま卒業した。先日卒業4年目の会があり久しぶりに出席したところ、幹事は講師をしながら5回目の挑戦で教員採用試験に合格したとあいさつした。昨年度もこの学年は2名が合格している。卒業時は講師として教員になった者の多くも2～3回目の挑戦で正規採用になった。初めから教員を希望せず一般企業に就職した者、結婚して子どもを育てている者、それぞれが自分で進路を見つけ、しっかりと歩み出している。

《2期生・3期生》

2期生、3期生も30名を少し越える程度の入学者で推移した。

2期生は全体におとなしい印象で、卒業までに2割以上が退学してしまった。学年としての横のつながりがあまり感じられなかった。国際研究第22号「小学校教員に求められる力についての一考察——中学・高校時代に関する実態調査から」⁽²⁾の実態調査で、高校時代の部活動・生徒会活動についての質問に、2期生は「していた」と回答した割合が7割弱であった。特に男子は半数以下で、このことが学生の雰囲気大きく関係しているのではないかと分析した。1期生も他大学生も8割以上という中で顕著な傾向であった。

3期生から、国際学部は経済学部のある稲毛キャンパスへ移転することになった。しかし、「地域こども教育専攻」が使用する理科室や音楽室などの施設整備が4月の段階では間に合わず、前期は水曜日・金曜日の2日間は佐倉キャンパス、残り3日間は稲毛キャンパスと2つのキャンパスを

使って授業が実施された。佐倉キャンパスでの2日間は、「地域こども教育専攻」の一部の学生だけが短大の中にいるという状況であったため、越川専攻長と2人で1限から5限まで佐倉キャンパスで授業以外の時間も待機し、5限終了後佐倉の広いグラウンドでのびのびと遊ぶ学生を日没まで見守って帰した。

またこの年からカリキュラムの一部が変更され、学生のリメディアル教育の必要から「文章表現」「口頭表現」が国際学部1年全員の必修科目となった。そのため「地域こども教育専攻」では1年間履修可能単位数の46単位を必修科目だけで超えてしまう事態になった。急遽、専任教員の「概説」をすべて2年履修に変更し、1年次にもある程度選択科目が履修できるようにした。現在「算数」「国語」「生活」「音楽」が2年次で履修するようになっているのはこのときからである。それに伴って「初等国語科指導法」「生活科指導法」を3年次の履修科目に移した。

2期生、3期生とも、3・4年専門研究は担当しなかったもので、卒業後の情報はあまりないが、3期生はこの佐倉キャンパスの経験からか、親しく相談に訪れる学生が多かった。

「地域こども教育専攻」の授業は発足当初から2年間はすべて佐倉キャンパスで行われたので、2期生までは千葉駅から下り方面（特に銚子方面）の電車で通学する学生が多かった。稲毛キャンパス移転に伴い、3期生からは千葉駅より東京寄りから通学する学生が次第に増えはじめた。（p. 7 参考1 表1）

《4期生》

4期生からはすべて稲毛キャンパスに統合され、通学範囲がさらに県北西部に拡がり、直通快速電車の千葉駅以遠から通学する学生にも便利になり、初めて定員を超える55名の入学者を迎えた。4期生に出会ったとき、明らかに今までの学生と違う印象をもった。都会的というか、明るく積極的な学生が多く、男女がとても仲が良かった。1限の授業開始時には全員そろって席に着いていた。授業開始前に席に着いて待っているの

は当然であるが、佐倉キャンパスは最寄り駅が物井という事情もあって、ローカル線で1時間に1本という列車に乗ってくるような学生の中には、1本早いと50分も前に着いてしまうので、と言って毎回遅刻する学生が複数いた。グラウンドや施設が学生の数の割には広く、授業中に抜け出して戻って来ない学生もあった。

4期生には全くそういう雰囲気がなく、どの先生も学生の変化を感じていた。「地域こども教育専攻」の存在が、高校訪問での広報活動や在学生からの情報などで少しずつ県内の高校に認知されてきたこと、何よりも総武快速線の停車駅、稲毛という地理的な便利さが多くの意欲あふれる学生を集めることになったと思われる。また、この年から音楽室のように収容人数に限度があるなどの施設面や授業内容から、クラスを2つに分けて実施する授業が出てきた。

〈参考1〉 入学時の学生の居住地

表1 入学前の学生の居住地

	千葉駅以遠 (総武・ 成田線 以東以南)	千葉市	千葉駅 以西・ 以北	県内 合計	県外		合計
					東京1	沖縄1	
専攻1期生	18	2	3	23	東京1	沖縄1	26
	69%		13%	88%	茨城1		
専攻2期生	17	4	2	23	東京1		25
	68%		8%	92%	神奈川1		
専攻3期生	21	1	6	28	東京1	栃木1	31
	68%		21%	90%	宮城1		
専攻4期生	28	9	12	49	東京1	岩手2	53
	53%		24%	92%	新潟1		
学科1期生	32	5	21	58	茨城1	大分1	61
	53%		36%	95%	福島1		
計	116	21	44	181	15		196
	59%	11%	22%	92%	8%		

(注) 転入生、中途退学者は含まず。

敬愛大学国際学部の小学校教職課程の入学者は例年9割が千葉県内出身者である。県内であっても、交通の便などで大学付近に転居して通学する者もあるが、2時間程度の通学時間では自宅から通学してくる学生が多い。この表では便宜上千葉駅から銚子方面に行く成田線を境とした。印西市は佐倉キャンパスのときの1期生は成田駅経由で通学していたが、この表では千葉駅以西・以北の中に入れてある。1・2期生ではほとんど変わらない割合が、3期生からは千葉駅以西・以北が少しずつ多くなっている。(表1)

〈参考2〉 地域こども教育専攻 こども学科の人数

地域こども教育専攻は定員50名。男女のバランスは少し男子が多いという程度である。

こども学科1・2期生の定員も50名。3期生からは70名である。2期生はあまり差がないが、1・3・4期生は男子の数が大きく女子を上回っている。県内の小学校教職課程で男子が入学できる大学が限られている事情があると思われる。(表2-1、2-2)

表2-1 地域こども教育専攻 卒業生数

	1期生	2期生	3期生	4期生	合計	割合
男子	14	12	17	28	71	53%
女子	12	12	14	25	63	47%
計	26	24	31	53	134	100%

表2-2 こども学科 在籍数(2015年1月現在)

	1期生	2期生	3期生	4期生	合計	割合
男子	36	33	42	52	163	63%
女子	25	27	24	21	97	37%
計	61	60	66	73	260	100%

2. 「こども学科」

小学校教職課程が設置されて5年目、国際学部国際学科「地域こども教育専攻」は、国際学部「こども学科」に昇格。学科にして外部からその存在が見えやすいよう、ネットで検索されやすいようにと学科にした。地道な高校訪問などで情報発信を続けたこと、「地域こども教育専攻」1期生の教職採用状況がよかったことなどが功を奏してか、定員をはるかに上回る65名が入学してきた。

小学校教員を目指す者に広く認知されるために「こども学科」にしたが、学科になってからは小学校教員免許取得は卒業要件でなくなった。これは国際学部「こども学科」を設置するにあたって、「国際学」や「こども学」の学びの必要性が文部科学省から求められたことによる。そのため、各教科指導法は卒業要件単位から外され、国際的な視野からの学びとして、従来からの国際学部の科目であった「比較文化論」や「異文化コミュニケーション」、英語関係の科目などを必修とし、新たに「こどもと〇〇」「世界のこども教育」のような「こども」を冠した科目が開講された。

この「こども学科」1期生は、東日本大震災の計画停電などの影響で、入学式などの諸行事が例年のように実施できず、授業も2週間遅れで開始された。そのような状況下毎年担当してきた1年基礎演習で出会った学生たちに驚いた。今思えば、高校卒業から大学入学までの空白の時期に大震災に遭遇した新入生の不安や混乱をもっと理解しなければいけなかったと思うが、学生たちはバラバラな印象で、震災のことを自分たちの身近な大惨事であると感じておらず、他人事のようにだと危機感をもった。「地域こども教育専攻」の4期生より10人も多く、少人数教育をうたってきた本学で、これまでのように一人ひとりの学生にいていねいに関わっていきけるのかと「こども学科」の前途に不安を覚えた。

男子の割合が高く、教室後方で化粧をしているような学生もいたり、

授業中私語が多くて困ると複数の先生から苦情が出され、授業の空き時間には他の先生の授業を参観したり直接学生を注意したりした。はじめから学ぶ気持ちがないのではないかと思われるような態度の学生もいたが、一人ひとりと話してみればそれぞれに思いや不安を抱えていることもわかった。1年先輩の「地域こども教育専攻」の4期生に新入生の現状を話したとき、その学生は人数が50名を越えるとなかなかまとまらないのではないかと、私たちの人数が一つになる程度だと言うと聞いていた。

震災を他人事のようにとらえていた新入生を何とか相手の立場を考え、お互いの心情を思いやり、共有感のもてる学生にと、直接授業で接することのできた学生数は多くなかったが、折あるごとに人との関わりについての話題を取り上げては私の経験や思いを意識的に語ることを繰り返した。学生たちが素直に自分の思いを表現できるよう、互いの距離を次第に近づけることを心がけた。

続く2期生は60名、3期生からは定員が70名に増員され69名、4期生は75名が入学した。必修科目で学生全員と出会い、顔と名前を知ることができるが、担当の必修科目「音楽」は前述のような過程で2年履修であるため、4期生はまだ名前と顔の一致する学生は多くない。

教科に関する科目としての「音楽」は、地域こども教育専攻のときは「初等音楽概説」という名称で、授業は「初等音楽科指導法」を履修する前段階として音楽理論や指導法に役立つ内容を組んでいた。しかしこども学科では「初等音楽科指導法」は必修科目ではなくなったので、小学校の教員免許を希望しない学生はこの「音楽」だけを履修することになる。また音楽実技は、「音楽と表現Ⅰ（合唱）」「音楽と表現Ⅱ（リコーダー）」「音楽と表現Ⅲ（ピアノ）」（旧「合唱」「器楽」）の3つの選択科目で履修することを前提に考えていた。「地域こども教育専攻」の学生は1年から音楽実技科目を履修できたので、学年にもよるが、これらの実技科目を全部あるいは複数履修して卒業する学生が多かった。

しかしこども学科では、「音楽と表現Ⅰ（合唱）」のみが1年で履修できる科目で、それ以外は2年以上の履修科目となった。その上学生数の増

加から重複して開講される科目が増え、時間割が複雑になって実技科目授業の履修がなかなか難しい状況になってきた。そこで必修科目「音楽」の授業で2期生からは合唱、3期生からは合奏を取り入れるようにした。実際、学生の音楽経験にはかなり差があり、合唱はともかく合奏や楽器の経験がほとんどない学生もいるので、「音楽」で実技を取り入れたことは音楽そのものの理解の上でも有効であった。実技は学生も楽しんで熱心に参加するが、その分理論的な理解に当てる時間が少なくなってしまうことが課題である。バランスを取りながら改良を重ねていきたい。

この「音楽」では、従来から外部から楽器をお借りし、講師の先生に来ていただいて日本の楽器に触れる機会を設けている。2コマだけではあるが、箏と三線を一人ずつ体験することができる。普段目にしていないピアノなどの楽器とは違う楽器の特徴、日本の音楽のよさを直接感じるができる貴重なチャンスである。毎回学生にこの体験の感想レポートを課題にしているが、その内容は年を追うごとによくなっている。手書きでなく、ワープロ原稿で提出する学生が大半になってきたこともあり、読み直して修正することができることが関係しているかもしれないが、何を感じてほしいかを理解してまとめられる学生が増えている。その反面、失敗をおそれる、石橋をたたいて渡る、完璧を目指す、やる前にあきらめてしまうといった学生のいることも感じている。

3. ゆとり教育

ここまでは、本学の小学校教職課程と授業を通した学生の様子などについて述べてきたが、これからはその学生の受けてきた教育について考察していきたい。

教育は不動のものではない。時代により、社会の在り方や価値観、環境などが大きく関わっている。社会の要請や過去の教育の反省などから揺れ動く。戦後の日本の教育は、「学習指導要領」に則って進められている。昭和33（1958）年の改訂で、それまでの「試案」であったものが初め

て法的拘束力のある全国統一のものとなった。その後昭和43(1968)年、昭和52(1977)年、平成元(1989)年、平成10(1998)年、平成20(2008)年とほぼ10年ごとに改訂されてきている。

「地域こども教育専攻」1期生は大半が昭和最後の年生まれで数人が平成の早生まれ(1988~89年)である。平成10年改訂のいわゆる「ゆとり教育」^③といわれる学習指導要領の教育を受けた世代になる学生である。入学の時から「僕たちゆとり世代です」と自ら勉強が足りないこと、基礎学力がないことを言っていた。

ゆとり教育の考え方は古く、昭和52年の改訂の時からすでに始まっている。戦後欧米諸国に追いつき追い越すことを目標に高度成長を遂げてきた日本はオイルショックを経ながらも1970年代後半には安定した社会を築いてきた。それまでの教育は一斉指導の画一的教育、科学技術教育の向上など高度成長を支える国民育成のための教育であった。詰め込み教育などのことばに象徴されるように学習内容が多く、子どもの学習負担は大きくなっていった。そこで1980年より実施された昭和52年の改訂の「学習指導要領」では、各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼって子どもの学習負担の適正化を図った。特別活動の時間を入れたうえで、高学年で週2時間授業時数が軽減された。1992年実施の平成元年の改訂においては、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を目指し、低学年に社会、理科にかわり生活科が新設された。

私は昭和52年9月に教員になった。ゆとり教育の考え方への移行期間にあたる時期で、当時から土曜休みが想定されていて、初任校では土曜日は「ノーかばんデー」と銘打って、集会などが中心で教科の学習はほとんど組まれていなかった。「ゆとりの時間」という時間もあり、教員は毎週その内容を考えなければならず、「ゆとりの時間」のためにゆとりがないと言っていたことを思い出す。

実際、学校の土曜日が休みになったのは、それから15年も経った平成4(1992)年9月、月1回第2土曜日の休みからである。平成7(1995)年4月からは第4土曜日も休みとなり、月2回土曜日休みになった。この土曜

休みは教育現場から出てきたものというより、海外各国の動向から日本でも週休2日を実施する企業が増えてきたことによる社会的な要請が先行していたといえる。そのため、学習指導要領の授業時間数を変更しないまま、月2回土曜休みが実施され、授業時間の確保は各学校の裁量に任された。「地域こども教育専攻」の1期生は、この月2回土曜休みが実施された年に小学校に入学した。

平成10年の改訂では、学校週5日制に対応して授業時間数が軽減され、2002年4月から、完全に土曜日休みとなった。このときの改訂が狭義の「ゆとり教育」と呼ばれるもので、基礎・基本を確実に身につけるために学習内容を3割削減して7割に精選し、すべての子どもが100点を取れるように指導する落ちこぼれをつくらないという発想であった。自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力（確かな学力）、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心（豊かな人間性）、たくましく生きるための健康や体力（健康・体力）の3本の柱に支えられた「生きる力」をはぐくむことを目標とした。「総合的な学習の時間」が中学年105時間、高学年110時間で新設され、学校週5日制の実施に伴い、週2時間授業時間数が削減されたため、教科等の授業時数が軒並み削減された（道徳、低学年の生活、音楽、図画工作、1～3年まで特別活動を除く）。またこれまで教科等の時間数は週1時間を年間35回実施するという35時間を単位に計算してきたが、この改訂でほとんどの教科の授業時数が35で割り切れない設定になり、現場では複数の時間割をつくるなどしてその対応に苦慮した。

「円周率は3で」などという文言がセンセーショナルにマスコミに取り上げられ、OECDの国際学力調査（PISA）の結果などからも、日本のゆとり教育に対する不安や批判が大きくなり、文部科学省は平成14年1月17日遠山敦子大臣が2002年「学びのすすめ」を発表。翌15年12月26日には学習指導要領の「ねらいの一層の実現の視点から一部改正」を出した。従来「学習指導要領」の内容は過不足なく行う基準で、この範囲を超えて指導しないとしていたものを学ぶ内容の最低基準であるので、実態に

応じてこの範囲を超えて指導してよいとした。同じ学習指導要領の解釈を途中で変えるという異常事態であった。

内容を7割に精選して全員がわかる授業をというのは机上の論理で、実際にはありえない。通常理解度をはかる検定試験のようなものでは合格点を70点程度に想定する。つまり内容の70%程度が理解できていればよしとする。もとの内容が7割ならその70%は5割を切ってしまう。どんなにがんばって教えて学んでも全員を100%にはできないだろう。

日常学習の試験は到達度試験であるので、100点が取れる。小学校の評価は、その多くがこの到達度評価で絶対評価であるため、正規分布による人数の輪切りや他人との比較による相対評価を経験しない。評価は目標にどれだけ到達することができたかを判定するもので、他と比較する必要はないし、一人ひとりのよさを認める評価をすることが大切である。しかし、前述の「地域子ども教育専攻」の1期生は、高校の評定平均は4.5といい成績であったが、それは定期試験時に限られた範囲の試験勉強をして受けた結果で、そのときだけ覚えた知識で身につけていないことを自覚していた。範囲の定まらない試験では7割取ればまずまずといえるだろう。国立大学受験のためにセンター試験の受験準備をしてきた学生は客観的な自分の学力を知っている。

「地域子ども教育専攻」1期生は、中学生になってから学校週5日制を経験した世代であるが、「日本の都道府県の名前がわからない」と言って自分で白地図を作って勉強していた。学習内容が削減されてきたことを自覚していた世代といえるだろう。

4. ゆとり教育世代のアンケート調査

2002年から実施された学習指導要領で学んだ世代がいわゆる「ゆとり教育世代」である。そこで「子ども学科」の2期生・3期生に「自分はゆとり教育世代だと思うか？」というアンケートを実施した。(表3)

2期生は必修科目「世界の子ども教育」の補講授業後2015年1月30日、

2年（3期生）は「初等音楽科指導法」後期試験終了時の2015年2月6日に行った。3年（2期生）は補講授業が重なったため、全員履修の必修科目であるが人数が少なかった。アンケートは、3年（2期生）39枚（男子21名、女子18名）、2年（3期生）59枚（男子37名、女子22名）の合計98枚回収。

質問は全部で10問。学生は、生年月・男女を記入してから各問に選択肢からの択一か自由記述で答える形をとった。

生年月は、高校からそのまま進学した学生は2期生（3年）1993年4月～1994年3月（平成5～6年）、3期生（2年）1994年4月～1995年3月（平成6～7年）である。

職業を経験したり、ほかのルートから入学したりした学生もあるので、すべてが該当の生年月ではないが、全員「地域こども教育専攻」1期生相当（1988年）以降の生まれである。

学習指導要領は、通常2～3年の移行期間を経て完全実施される。小学校では平成10年改訂の学習指導要領は2000年度から移行措置期間に入り2002年度から完全実施。2009年度からは次の学習指導要領の移行措置期間に入った。2期生（3年）の小学校入学時は移行期間にあたり、小学校3年からは完全実施で以後高校3年までこの学習指導要領の内容で学習した。3期生（2年）・4期生（1年）は中学校で1年か2年、次の学習指導要領の移行期間を経験している。そのため2期生（3年）が最も平成10年改訂のいわゆる「ゆとり」の学習指導要領で学習をした年齢といえる。

〔問1〕あなたは自分をゆとり教育世代だと思っていますか？（表3）

2期生（3年）女子は1人だけ「思っていない」と答えている。男子は「思っていない」「わからない」という回答が多い。反対に3期生（2年）は女子の20%以上が「思っていない」と答えているのが目立つ。自分はきちんと勉強してきたという意思表示のように取れる。「わからない」と答えた学生は「ゆとり教育世代」という言葉の意味を理解していないと思われるケースと自分では判断できないと思っているケースがあるよう

表3 あなたは自分をゆとり教育世代と思っていますか？

○2期生(3年)

	思っている	思っていない	わからない	計
男子	14	3	4	21
	66.6%	13.4%	19%	
女子	17	1	0	18
	94.4%	5.6%	0%	
合計	31	4	4	39
	79.5%	10.3%	10.3%	

○3期生(2年)

	思っている	思っていない	わからない	計
男子	32	0	5	37
	86.4%	0%	15.6%	
女子	16	5	1	22
	72.7%	22.7%	4.5%	
合計	48	5	6	59
	81.3%	8.5%	10.2%	

だ。かなり差があるように見えるが、男女を合わせて集計すると学年差はほぼない。

[問2～4] 小学校時代、中学校時代、高校時代の勉強(表4、表5)

小学校時代、中学校時代、高校時代の勉強について「よく勉強した」「まあ勉強した」「あまり勉強しなかった」「全然勉強しなかった」の4択でたずねた。

はじめは、問1のゆとり教育世代だと「思っている」と回答した学生と「思っていない」「わからない」の学生を分けて集計したが、「思っていない」「わからない」の人数が少ないため、全体としての傾向の違いは読み取れなかった。なお、これ以降の集計は学年に統一して表記する。

2年、3年合わせた男女別の集計(表4)では、男女に差が認められる。小学校時代では、女子の「全然勉強しなかった」は2年の1名だけである。男子と比べると圧倒的に少ない。特に3年女子では、小学校時代はだれもおらず、中学校時代で1名である。しかし、高校時代になると女子で

表4 勉強しましたか？（全員）

		男子			女子			総計
		3年	2年	小計	3年	2年	小計	
		21	37	58	18	22	40	
小学校時代	よく勉強した	3	9	12	7	6	13	25
	まあ勉強した	9	11	20	5	9	14	34
	あまり勉強しなかった	6	8	14	6	6	12	26
	全然勉強しなかった	3	9	12	0	1	1	13
中学校時代	よく勉強した	7	7	14	7	4	11	25
	まあ勉強した	6	8	14	4	13	17	31
	あまり勉強しなかった	6	13	19	6	2	8	27
	全然勉強しなかった	2	9	11	1	3	4	15
高校時代	よく勉強した	4	3	7	6	4	10	17
	まあ勉強した	9	11	20	4	12	16	36
	あまり勉強しなかった	6	10	16	4	1	5	21
	全然勉強しなかった	2	13	15	4	5	9	24

も「全然勉強しなかった」が大きく増えている。

小学校では女子の方がしっかりとしていて真面目に勉強するということは経験的に感じていることでこのアンケートにもそれが明らかに表れている。

次に学年によって同じデータを集計して比較してみる。(表5)

小学校時代は「よく勉強した」「まあ勉強した」が3年、2年ともほぼ同率で全体としてもあまり変わらないが、高校時代になると2年の「全然勉強しなかった」が30%に上昇し、「まあ勉強した」の39%とで2つのピークになっている。

「よく勉強した」だけに注目すると、3年は小学校時代26%。中学校時代36%高校時代26%、とあまり変化がないのに対して、2年はそれぞれ、25%、19%、12%としだいに下降している。特に男子に限ると、9名、7名、3名と急速に減少している。

全体に3年の方が、各時代あまり変化がないのに対し、2年は変動の幅が大きい。次の問いで中学校時代死ぬほど勉強したという表記があった

表5 勉強しましたか？

○3年

	よく勉強した		まあ勉強した		あまり勉強しなかった		全然勉強しなかった		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学校時代	3	7	9	5	6	6	3	0	21	18
	10		14		12		3		39	
	26%		36%		30%		8%			
中学校時代	7	7	6	4	6	6	2	1	21	18
	14		10		12		3		39	
	36%		26%		30%		8%			
高校時代	4	6	9	4	6	4	2	4	21	18
	10		13		10		6		39	
	26%		33%		26%		15%			

○2年

	よく勉強した		まあ勉強した		あまり勉強しなかった		全然勉強しなかった		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学校時代	9	6	11	9	8	6	9	1	37	22
	15		20		14		10		59	
	25%		34%		24%		17%			
中学校時代	7	4	8	13	13	2	9	3	37	22
	11		21		15		12		59	
	19%		36%		25%		20%			
高校時代	3	4	11	12	10	1	13	5	37	22
	7		23		11		18		59	
	12%		39%		19%		30%			

ので、程度の変化が激しいのかもしれない。3つの時代を通して「全然勉強しなかった」と答えたのは、3年男子1名、2年男子4名、女子1名であった。

〔問5～7〕それぞれの時代に「がんばったこと」「夢中になったこと」(表6)それぞれの時代に「がんばったこと」「夢中になったこと」について聞いた。具体的にそれを記述するか「特にない」を選ぶようにした。

表6 「がんばったこと」「夢中になったこと」が特にない

		小学校時代	中学校時代	高校時代	合計
3年	男子	2	2	4	8
	女子	2	1	1	4
2年	男子	5	5	6	16
	女子	2	3	1	6
合計		11	11	12	34

ここではどんなことに力を入れていたかを知りたいことと、「特にない」と答える学生がどのように変化しているかを確かめたかった。(表6)

小学校時代から高校時代までずっと「特にない」と答えた学生は、3年男子1名、女子1名、2年の女子1名の3名であった。それ以外はどこかの時代ががんばったこと、夢中になったことがある。2年女子は前問4ですべてに「全然勉強しなかった」と答えた学生であり、どんな学校生活を送ってきたのか気になる。全部を集計すると小・中・高校を通じて、ほとんど人数に差はなく1割強の人数である。

「がんばったこと」「夢中になったこと」としては、次のようなものが記述された。

小学校時代夢中になったものは、運動系が多く、両学年とも3分の2の学生が挙げている。男子は「野球」(13)「サッカー」(12)、女子は「バスケットボール」(9)が多く、「クラブ活動」「部活」という表記をした学生もいる。上記以外に複数が挙げたスポーツは、「水泳」「テニス」「陸上」などで、「空手」などの武道もあった。もちろん「友達と遊ぶ」「外で遊ぶ」などの「遊び」(12)や「絵を描く」「ピアノ」などの室内の活動(9)もあった。また、「学校行事」や「マラソン大会」「児童会活動」(8)などのほか、「勉強」(2)「テストで100点を取ること」「漢字」「授業」(各1)の記述もあった。

中学校時代は、圧倒的に「部活」で、スポーツ名を具体的に挙げたものと合わせると数ではほぼ回答の人数分ある。「学校行事」や「生徒会活動」を挙げた学生も14名いる。「高校受験」「勉強」「英語」などをがん

ばったと答えた学生は14名いた。「なすことすべて」と書いた学生もあり、中学校生活に全力投球していたことが察せられる。複数回答なので、その程度は判断しにくいだが、全体的に2年の方がスポーツ系を好み、活動的な様子がうかがえる。

高校時代も「部活」が多いが、スポーツ名を挙げたものも含めて全体的に1割ほど中学校時代より減少している。2年は「サッカー」(8)「野球」(6)「陸上」「テニス」(各4)「バスケットボール」(3)、3年女子の「バレーボール」(3)が目立つ。「趣味」の記載も増え、3年は「受験勉強」などの勉強を10名が挙げた。「バイト」(5)も初めて登場する。

【問8】自分には基礎学力があると思いますか？(表7)

「自分には基礎学力があると思いますか?」、またそれはなぜですか?を4択で理由とともに質問した。

「十分にある」と答えた学生が2年男子に1名だけいた。理由には「なんとなく」と書かれていて、それほど苦勞せずに勉強ができてきたということのようだ。そのほかの学生は9割が「ある程度ある」か「あるとは言えない」で予想通りの回答といえる。ただ、男女でその割合に差があり、女子は「ある程度ある」が6割に対して、男子は4割程度で、理由に「学校に行って勉強してきたから」とか、小・中・高校のどこかの時代で「よく勉強したから」と回答している。2年男子は「あるとは言えない」「ない」で4割を超えている。

問1の「自分をゆとり教育世代と思っているか?」の質問に「思っ

表7 基礎学力

	男子			女子			合計
	3年	2年	小計	3年	2年	小計	
十分にある	0	1	1	0	0	0	1
ある程度ある	12	12	24	11	14	25	49
あるとは言えない	7	20	27	6	7	13	40
ない	2	4	6	1	1	2	8
合計	21	37	58	18	22	40	98

いる」と答えた学生と「思っていない」「わからない」と答えた学生で回答に差が出るかと予想したが、その割合に違いは認められなかった。自分がゆとり教育世代だから、基礎学力がないというようには考えていないのではないと思われる。

自分の受けた教育しか経験できないので、それがほかの時代やほかの人と比較してどうかということは本人にはわからないということだと考える。

〔問9〕もっと学校で勉強しておけばよかったと思うこと（表8、表9）

「もっと学校で勉強しておけばよかったと思うことがありますか？」を3択で、またそれはどんな時（こと）であるかを具体的な記述で回答を求めた。

表8 もっと勉強しておけばよかったと思うこと

	3年		2年		計
	人数	割合	人数	割合	
ない	4	10%	4	7%	8
時々ある	13	33%	16	27%	29
ある	22	57%	36	61%	58
無回答	0	0%	3	5%	3

この質問にはたくさんの具体的な記述があった。もっと学校で勉強しておけばよかったと思うことは「ない」と答えた学生には、座学の勉強よりもっと大切なものがあると考えて選んだと思われる回答が複数あった。

いま大学で学んでいたり、塾でバイトしていたりしている毎日のなかでの体験的な記述が多い。学生自身が現在の自分に足りないと感じていること、あるいは後悔していることを記述していると考えられる。複数回答であるので、項目としては100を超えていた。実際に学校現場に触れている（教職たまごプロジェクト）3年と2年とではその経験の有無や環境の違いから記述内容に特色があった。授業や日常の生活の中で感じた「もっと勉強しておけばよかった」と思った場面で多かったのは以下である。

表9 もっと勉強しておけばよかったと思うとき

できないことや知らないことがあったとき	8
人に教えたり伝えたりできないとき	7
他人の話についていけないとき	6
一般常識を知らないと感じたとき	5
人と話しているとき	4

[問10] 小学校から高校までの間に、何をしておくことが大切だと思えますか？(表10-1、10-2)

最後の問10では、「小学校から高校までの間に、何を勉強したり、どのようなことを身につけたりすることが大切だと思えますか？」を具体的に記述してもらった。学生の思いを直接伝えられるように大まかに分類し学生の記述のまま載せる。(表10-1、10-2〔()内の数字は人数])

どちらの学年も「基本的な生活習慣」や「基礎学力」「ルール・マナー」「コミュニケーション」に関わる記述が多い。3年になくて2年にあるのは「道徳心」である。

後期末に調査したので、学生がそのときに気になっている授業やその内容が関連していると思われる。学生自身が思っている「身につけておくことが大切」なことで私が日常学生から感じていることの多くは一致している。

表 10-1 身につけておくことが大切だと思うこと

○3年

基本的な生活習慣(4) 基礎(2)

ルールやマナー(4) 礼儀(2)

基礎体力(2)

基礎学力(7) 基礎知識(2) 基礎的な学力(2)

一般常識(5) 雑学知識

自然や社会の知識などを身につける

学習習慣(4) 勉強の仕方(2)

本を読む習慣 新聞を読む習慣

勉強を楽しいと思うこと

既習を応用しながら次のステップへいけるような勉強

問題解決の方法

その場限りの知識ではなく、それをもとに考える力を身につけさせる

チャレンジして自分自身で得る力

興味のあることを見つける(3)

現代社会のこと、自国の歴史、英語、キャリア教育を徹底させる

コミュニケーション能力(4)

対人関係の能力

人とのコミュニケーション力(2)

人とのかかわり方(3)

友達づくり(2)

集団生活

国語 相手に伝えるために 話す力

文章表現能力などもっと自己を表現する技能が必要

失敗することを怖がらずとことん挑戦できる勇気

嫌なことでもやり遂げる力

自律性 積極性

自ら取り組む

将来をしっかりと考えていくこと

社会へ出るための勉強

努力の楽しさ

いろいろなことを体験する

部活の厳しさ

生きることの大切さ

親ともっと会話する

学校でしか学べないものを身につける

感謝の気持ち

整理 遊び心

英語 TOEIC

受験勉強

座学はある程度でよい

表 10-2 身につけておくことが大切だと思うこと

○2年

道徳的な考え、心(4)

礼儀 マナー(7) 言葉遣い 公共のルール
基礎体力(2)

常識(6) 一般教養(2)
基礎学力(8) 基礎知識(3) 最低限の知識(2)
とにかく基礎を勉強する
少なくとも漢字と数学 漢字
国際化に備えて英語を重点に

勉強がなぜ大切になってくるかというリアルな話
勉強することの大切さ 意義(2)
学ぶことの意味
勉強に取り組もうという姿勢
自ら学ぼうとする姿勢 学ぶ姿勢
勉強の仕方を身につける(2)
学びたいという気持ち
わかることの楽しさ

国語力

社会に目をむける
ニュースを見る 新聞を読む力
世界情勢 物事に対する視点
生活とかかわりのある内容
学力を生かせる力

コミュニケーション能力(5) 人とかかわり方
友達の作り方 友達との人間関係
親しい友達を多く作ること
知識をつけることも大切だが、人間性をつけることの方が大切
相手を思いやる心(2) 人間性
表現力(2)
言語力 対話力

自分が夢中になれること
自分をもつ
得意なものを見つけ伸ばしていく(2)
何か好きなことを見つける
いろいろなことを経験すること
何事も経験
努力し続けること
すぐあきらめないこと
目標に向かって努力できる力
一生懸命物事に取り組むこと
チャレンジ精神

むすびに

こども学科1期生61名が今春卒業する。学科になって小学校教員免許取得が卒業要件と切り離されて初めての卒業生である。東日本大震災という大災害の直後に入学してきた1期生は1年目にはいろいろな問題があった。しかしそれから4年、学生たちは授業やボランティア、アルバイト、大学祭、教育実習などでたくさんの人たちと出会いながら学び、さまざまな経験を通して心豊かな思いやりのある若者に成長した。

学ぶということは知ることや体験することを通して、感じたことや考えたことを自分の生活に結びつけて考えることだと思う。人と関わり合いながら、自分の思いや考えを深め、自分を見つめ自分自身を知ることが学ぶことの意味ではないか。そのことを通して、自分がどのように生きていくか、自分には何ができるかを考え、自分を生かし行動することで一人ひとりが幸せになる。

教員採用試験の志願書には自己アピールや志望動機を書く欄がある。「なぜ教員になりたいのか?」「どんな教員を目指すのか?」「自分の長所は何か?」これらはすべて自分をよく見つめ、自分自身を知ろうと考えなければ答えられない。企業に就職するにも、「なぜこの業種なのか?」「この会社で自分は何ができるのか?」などをしっかりと考えることが大切である。

今回、本稿では学生たちが「ゆとり教育世代」であることに注目したが、小学校に勤務していて平成になったころから、学習内容が大きく変化してきたことを実感していた。知識・理解より興味・関心、理論より活動を重視するといった教育の考え方の大転換が根底にある。従来はいかに教えるか、どれだけ学ぶかということが教育の最大の関心事であったが、学びの場を学ぶ側の視点から考えようとする変化である。実際、興味・関心のあることには意欲をもって取り組み、特に小学校の場合は実際の活動を通して学ぶことは欠かせない。

一斉指導や定まった内容の教授は、一度確立すればそれを繰り返すことができる。教える側にとってはいくつかのパターンを用意することで準備ができるし、知識の一方的な伝達には有効な方法である。また知識はテストなどで子どもにもその結果がわかりやすい。しかし、学ぶ側の立場から学習指導を考えるのは容易ではない。ゆとり教育の目玉とされた「総合的な学習の時間」はこの学ぶ側に立った学習といえるだろう。子どもたち一人ひとりが自ら課題を見つけ、自分の力で解決していくことが求められている。導入前の先行研究から当時の勤務校の校内研究でその内容や構成、方法などさまざまな実践研究をした。教科書のないこの授業には綿密な事前準備・計画が必要で、指導者の力量が問われる。そこに指導者自身がこの授業で何をを目指すのかというしっかりした思い・意図があれば、想定外の事態にも対応できる。また日常の授業で子どもたちをどのように育てていくのかも問われる。現行の学習指導要領ではこの「総合的な学習の時間」は縮小されたが、これから生きる子どもにとって大切な学びであることはいうまでもない。

人は自分の経験から考える。学生の学習経験はさまざまで、30クラスもあるようなマンモス校で育った学生も、全校で100人に満たない小規模校で育った学生もいる。自分の通った小学校がその学生の小学校のイメージでありモデルになる。外から見える環境だけでなく、その授業の質や内容は実にさまざまで、大学入学までの12年間でその経験は大きく異なっている。今回のゆとり教育世代のアンケートはあくまでも学生自身の経験からの主観による記述でその客観性は乏しい。同じ環境にあってもそのことで感じる学生の思いは一樣ではない。

そのことをしっかりと理解した上で、自分のことを正當に自己評価できる学生を育てることを大切にしたい。「ありのままの自分」をきちんと受け入れ、素直に自分を表現することのできる学生を育てたい。自分のよいところ、足りないところをきちんと自覚して努力すること。自分自身を律して安易な道に流されないこと。さまざまなことに興味をもって自分の幅をひろげようとする。失敗を恐れず挑戦すること。反省を

生かし同じことをくりかえさないこと。困っている人の立場を親身になって考えられること。自分の言動に責任をもち、決して他人のせいにならないこと。これらは人として生きる基本である。

今年2015年は阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件から20年にあたる。学生たちは社会が大きく揺れ動いたその時期に生まれている。2011年春の東日本大震災の経験は、日常の当たり前の生活がいかにもろくかつ大切であるかを教えてくれた。

8年前、佐倉キャンパスに「地域こども教育専攻」として産声をあげた国際学部の小学校教職課程が「こども学科」になり4年、現在260名もの学生が在籍している。教員を目指す学生にとってもそうでない学生にとっても、この国際学部こども学科での4年間の学びがその後の人生を豊かに充実させるもととなることを心から願い、学生とともに努力を続けていきたい。

(注)

- (1) 鎌田慧著「教育工場の子どもたち」(初版)、1984年1月、岩波書店(2007年4月、岩波現代文庫)では、1980年代初め、「管理教育」を推進していたとされる千葉県小学校教員の多くが「純粋培養の教師たち」の敬愛短大出身者であることを取り上げている。
- (2) 山本陽子『小学校教員に求められる力についての一考察——中学・高校時代に関する事態調査から』、21-78ページ(45-47ページ)を参照。『『敬愛大学国際研究』第22号(2008年12月)教育特集』
山本陽子『小学校教員に求められる力についての一考察——地域こども教育専攻』学生の実態と「こども学科」のこれから』、55-80ページ。『『敬愛大学国際研究』第25号(2012年2月)教育特集』では入試形態の違いによる学生の実態を中心に分析している。
- (3) 小中学校は2002年、高校は2003年施行された第5次学習指導要領で授業を受けた世代をさす。この学習指導要領で教育を受けたのは、1987年(昭和62年)4月～2004年(平成16年)3月生まれである。2002年1月17日、当時の文部科学大臣遠山敦子氏が、世間で学力低下が懸念されている新しい学習指導要領が全面实施されるに先だって「確かな学力向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を発表。ゆとり教育に対する批判に応える形で2003年(平成15年)12月26日には「ねらいの一層の実現の観点からの一部改正」が出された。